



命のバトンタッチ～伝えられるときに伝える～

夏休み中の中高生を対象に「ドキドキ赤ちゃんふれあい体験」を行いました。4か月健診や7か月相談を受けにみえた赤ちゃんやその保護者とふれ合う事を通して、家族や命について改めて考えてもらうことを願って、毎年企画しています。今年度は、4回開催で34人の生徒さんに参加してもらいました。すでに将来の夢（助産師・保育士・教師等）を見据えて、この体験に申し込んだ生徒さんもしれば、赤ちゃんを抱くのは生まれて初めてという生徒さんもありました。



生徒さんの感想からは、命の尊さや家族への感謝が存分に感じられました。紹介します。

「赤ちゃんはとても温かくて、命があるんだと感じました(中1女子)」

「命のぬくもりを感じ、家族は大切だと学んだ(中1男子)」

「お母さんが自分の赤ちゃんを本当に大切にしているのが分かった(中2女子)」

「親がこんな思いをして自分を育ててくれたことを、今日、とても嬉しいと思いました(中1男子)」

「少しの時間、ふれあっただけでも大変だと感じたのに、毎日一緒にいてお世話しているお母さんはすごいなと思った。『自分も大変だったのかな』と感じて、ここまで育ててくれた親に感謝して、これからも生きたいと思った(高1女子)」

「初めて会う子が愛想よく笑ってくれて、こんなにもうれしかったから、我が子が成長していく姿を見られることは、親にとってとても大きな喜びであるだろうと思った(高2女子)」

「私は将来子どもが欲しいとずっと昔から思っているし、子どもが大好きなので、教師になりたいと思っています。どのお母さんもとても大切そうに我が子を抱いていました。そんな大切な子ども達の安全や健康を気かけられる教師になりたいなと思いました。(高3女子)」



思春期を迎え、さまざまな悩みや気持ちを抱えているであろう年代の子どもたちが、体験を通して、まっすぐに純粋に命に向き合っている姿を見ると、大人としてとても幸せな気持ちになります。それと同時に、私たち大人も、人生の先輩としての経験を生かして、命についてきちんと子ども達と向き合い、命のバトンを渡していかなければならないと、改めて身の引き締まる思いがします。

少し前になりますが、前蘇南中学校校長の若原俊和氏が書かれた「命のバトンタッチ(可児市教育研究所だより 第120号掲載)」という文章を読ませていただきました。(皆さんにもぜひ紹介したいと思い、ご本人に許可をいただき、裏面に掲載させていただきました。)

今回、体験を通して、家族から大事に大事に、愛情や手間をいっぱいかけてもらって赤ちゃんは育てられているのだということを感じた生徒さんたちは、きっと改めて自分の命のバトンの重みを感じたことでしょう。

命のバトンタッチ

前蘇南中学校校長 若原 俊和

諏訪中央病院名誉院長の鎌田實さんをご存じでしょうか。東日本大震災のときには、いち早く現地に入り、いつもの穏やかな表情で当然のように医療や調査活動をし、被災地の方々に勇気と希望を与えておられました。その鎌田實さんの講演の内容が記された記事（「お母さんからのバトンタッチ」致知 2012年7月号）に深い感銘を受けました。（中学校の「私たちの道徳」にも掲載されています。）

スキルス胃がんに罹った女性(42歳)は、余命3か月と診断され、諏訪中央病院の緩和ケア病棟に入院しました。彼女には二人の娘（高校3年生、高校2年生）がいます。彼女は、1年8か月も生きて、二人の娘の卒業式を見ることができました。その後、1か月ほどして亡くなりました。（前半部分要約）

「母は家に帰ってくるたびに、私たちにお弁当を作ってくれました。」と娘さんは言いました。彼女が最後の最後に家へ帰ったとき、もうその時は立つこともできない状態です。病院の皆が引き留めたんだけど、どうしても行きたいと。そこで、僕は、「じゃあ家に布団を敷いて、家の空気だけ吸ったら戻っていらっしやい。」と言って送り出しました。

ところがその日、彼女は家で台所に立ちました。立てるはずのない者が最後の力を振り絞ってお弁当を作るのです。その時のことを娘さんはこのように話してくれました。

「お母さんが最後に作ってくれたお弁当はおむすびでした。そのおむすびを持って、学校に行きました。久しぶりのお弁当がうれしくて、うれしくて。昼の時間になってお弁当を広げて食べようと思ったら、切なくて、切なくて、なかなか手に取ることが出来ませんでした。」

彼女の人生は40年ちょっとでした。とても短い命でした。でも命は長さじゃないですね。お母さんはお母さんなりに精一杯必死で生きて、大切なことを子どもたちにちゃんとバトンタッチした。（略）

「子を思う親の心」というのは、奇跡を起こすほど不思議で奥深いものです。だからこそ、その命をバトンタッチされた子どもは、その重みをずしりと感じるのです。

私たちは、誰かに命のバトンをもらい誰かにそのバトンを渡します。一人ひとりハリレーの選手のように走る距離に限りがあります。長く走る人もいれば、短い距離を走る人もいます。

自分がもらったバトンがどんなバトンであろうとも、努力を積み重ねてより立派で価値のあるバトンにして、自分の子どもに渡してほしいと思います。それがバトンを受けた者の使命だと思うのです。

これからの世の中は、ますます命が軽んじられてしまう危険を感じます。だからこそ、私たち教育に携わる者が、子どもたちに価値あるバトンにする努力を教育育んでいくべきです。それが、教育の役割であり、私たちの生きがいなのではないでしょうか。

この文章は、教育に携わる者に向けて書かれていますが、親である私たちに対しても、我が子へ「命のバトン」を渡していくという責任があるのだと投げかけているように感じられます。

子どもを授かったときの気持ち、家族みんなの愛情、この手に我が子を抱いたときの喜び、大変だけれど、本当に愛おしいと思ったこと…どれも、学校だけでは教えることができません。親だからこそ、家族だからこそ、伝えられる思いを、伝えられるときに伝えていくことも、命のバトンを繋いでいくことになるのだと思います。



可児市役所 子育て支援課 親子まなび支援係
後藤 愛
電話：62-1111 (内線2437)
FAX：63-6751

